

『ハuckleベリー・フィンの冒険』における 「筏の生活」の再考

瀧澤典子

序

マーク・トゥェイン (Mark Twain) の著書『ハuckleベリー・フィンの冒険』 (*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884) において、主人公のハックは「筏 (raft)」を “home” と呼ぶ。しかし、ハックの生まれ故郷はセント・ピーターズバーグであり、そこには父親も友人たちもいる。それにもかかわらず作者がハックに「筏」を “home” と何気なく呼ばせていることに考察の余地を与えている。従来の研究では、多くの場合、筏の上の世界は、束縛と矛盾に満ちた文明社会の現実と対比させながら、「自由の象徴」や「道徳の試金石」と見なされてきた。河岸の社会から逸脱したハックとジムの牧歌的な筏における生活は、何か理想的なもの、尊きものを象徴しているかのように思わせるかもしれない。しかし、ハックの冒険はもともとこのような理想を求めて始まったわけではないことを記憶に留めておかななくてはならない。実のところ、彼は父親の暴力やミス・ワトソンとダグラス未亡人の押し付けがましい教育に耐えかね、やむを得ず逃げただけなのだ。本稿では、筏と河岸の社会を行き来してさ迷っているハックの言動に注目し、それと各々が独立しているかのように思わせる数々の冒険エピソードがどのように関連し得るのかを示したい。そしてこのように河と陸をさ迷うハックはなぜ「筏」を “home” と呼ぶのか、そこに含まれる意味を、作者トゥェイン自身の内に秘められた過去と照らし合わせながら考察する。

1. 「煩わしさ」から逃れる旅

ハックの冒険は逃げることを余儀なくされて始まったのであり、何か達成すべき目的を掲げていたわけではない。ハックは、ダグラス未亡人の家での窮屈な生活に、また父親の住む小屋で受ける暴力に耐えかねて、己の死を装いジャクソン島へ逃げた。姿を晦ます時のハックは次のようなことを言う。

「それからみんなはあの粉のあとをたどって (中略) おらを殺して物を盗んでいった泥棒たちを、探すだろう。そのうちすぐくたびれちゃって、おらのことなんてもう構わなくなるだろうぜ。よし、そうしたらどこでも好きなところにとどまれる。おらにはジャクソン島が打ってつけだ。あの島ならよく知ってるし、だれも来やしない」 (Twain 1885: 41)

ここで言う「みんな」とは彼を知る同郷の人々のことで、ハックは彼らが自分を構うことを煩わしいと思って町を飛び出してきたことが分かる。彼はダグラス未亡人と父親が自分をめぐって

親権争いをしているところを飛び出してきた。「みんなはもう構わなくなる、そうしたらどこにでもとどまれる」と本人が言っているように、束縛されることの煩わしさから逃れられるならば、どこでも彼の居場所になり得るのである。初めの逃亡先となったのはジャクソン島であった。これはセント・ピーターズバーグから2マイル半ほど下ったところにあり、町からさほど離れてはいない。そしてこの島は『トム・ソーヤーの冒険』(Twain 1876)においてトムとジョー・ハーパーと共に一週間海賊ごっこをして過ごしたところのある場所でもあり、入念な考えからというよりは、思い付きの判断であることがうかがえる。Coxはハックの旅が無計画な逃亡の旅であることを次のように説明している。「探求とは、努力、ある目的を達成するための苦闘を当然伴う建設的な旅のことを言う。しかしハックは逃げている。彼の旅はもともと非建設的である。横暴な行為からの逃亡であり、自由への逃亡ではないのだ」(1996: 172-173)。Coxの指摘するとおり、「煩わしさ」を感じさせる窮屈な生活から逃げられさえすれば、ハックの望みは叶えられるのである。つまり、ジャクソン島でなくとも束縛感から逃れることのできる場所であれば、どこでも居止まれたのである。

2. 逃げ場としての“home”

生まれ故郷のセント・ピーターズバーグを去ったことでハックは拠り所となる“home”を失った。ダグラス未亡人の家も父親の小屋も彼の住処にはなり得ず、代わりに「筏」を“home”と呼ぶようになる。ハックとジムの人間社会から逸脱した、開放感に満ちた牧歌的な生活は、筏が現実の世界には存在しえない、楽園であるかのような印象を与える。このようなイメージから、筏は「道徳の試金石」(Dyson 1961: 341)、「自由の象徴」(Marx 1953: 302)と表されている。他にも筏を現実の世界に相対する、何か理想的なものを担っている場所と見なし、さまざまな解釈がなされてきた。しかし、ハックの望みは束縛されることの煩わしさから逃れることであり、そのような高い理想を筏で実現させようとはもともと考えていない。筏においては、人として深く後悔を迫られるような悪ふざけをハックがジムに対してすることもあった。また、彼はしばらく筏を離れて「トム」と名を偽り、河岸での裕福な生活を満喫してもいた。しかし、それは長続きせず、南部貴族同士の争いに巻き込まれかけたところで筏に駆け戻る始末となり、その時ハックは次のようなことを言う。「やっぱり筏ほどいい住処はねえとおらたちは言った。ほかの場所は窮屈で息がつまりそうだけど、筏ではそんなことねえ。筏にいるときは自由で気楽で居心地がいいや」(Twain 1885: 155)。

この「筏が一番」という言葉には、ハックの“home”に対する正直な考えが如実に反映されているのではないだろうか。彼にとって“home”とは「自由で気楽で居心地の良い場所」であり、窮屈な思いをしない限りそこは彼の“home”になり得る。そして彼は、「やっぱり、結局のところ」筏が一番だと言っているのである。そもそも自然の脅威にさらされながら南へと押し流されて行く運命にある、脆く不安定な筏がはじめから安住の地になるはずはないであろう。彼の旅は煩わしさからの逃亡に始まり、自由で気楽で居心地の良い生活を続けて行くには筏しか場所が残っていなかったのである。「筏が一番」という言葉から、このような真意を汲み取ることができるのではないだろうか。つまり、煩わしさを感じさせる窮屈な場所からの逃げ場として、筏はハックに唯一残された場所なのである。

3. 筏と河岸の社会を行き来するハック

ハックは煩わしさを感じない限り、その場を離れることはないのであるが、「筏が一番」と言うまでに、また、その後も、名前をさまざまに偽っては河岸の社会を何度も訪れる。そしてその見聞が多種多様なエピソードとなってこの物語に収められている。各々のエピソードがどのような関連性をもって繋がっているのかがよく疑問視されるが、それらは数ある冒険談の中からハックが掻い摘んで語ったものであり、少なくともハックの心理においては何らかの関連性をもって繋がっていると考えられる。

では、旅のエピソードを語るハックの脳裏ではどのような心理が蠢いていたのだろうか。Beaverは、ハックが快樂原則に基づいて行動していることを指摘している。「彼の反応はすべて感覚である。ただ感覚によるのだ。感覚のほか何でもない。彼の同情心と行いには何の繋がりもないようだ。何の知的見地もない。彼の感じることとすることには何の一貫性もないのだ」(1987: 96)。彼が指摘しているとおり、ハックがどのような行動をとるかは、ほとんどの場合、彼自身が快く感じるか否かによる。彼は旅の途中で「快」を表す言葉(“easy”, “comfortable”)や、不快を表す言葉(“uneasy”, “uncomfortable”)をよく口にするが、これらは自由で気楽で居心地の良い場所としての“home”を求める、彼の変わらぬ快樂原則に基づく、感覚的反応を表していると考えられる。

しかし、結局のところはハックにとって筏が一番の逃げ場となるのであるが、名前を偽っては河岸の人間社会へ何度も出かけているということは、筏にも彼の快樂原則に沿わないものがあったことを示唆する。ハックにとって筏が必ずしも常に「自由で気楽で居心地の良い場所」ではなかったということである。その原因は、自然の脅威に抗えない筏の脆さよりも、彼が旅の仲間に行っているジムの存在にあると考えられる。故郷とは縁を切った彼であるが、黒人差別主義者の父親を持つハックにとって逃亡奴隷ジムを旅の伴侶とすることに何らかのストレスを感じていたことは想像に難くない。ジムと一緒にいる限り、河岸の社会からやって来るジムの追っ手たちに煩わされることになるのである。筏の上で楽園のような生活を謳歌しながらも、ハックはジムが逃亡奴隷であるがゆえに、少なからず不安を抱いていたことが推察できる。実際、彼はジムを密告しようとしたこともあった。ハックが筏に乗って逃走し続けなくてはならないのは逃亡奴隷ジムを旅の仲間に行っているからであり、しかし、筏が不快に感じて陸に戻ったところで、また窮屈な思いをするだけなのである。筏と河岸の社会を行き来するハックの脳裏にはこのような矛盾する感情があり、彼の行動は、また一見繋がりがないように見えるエピソードも、この筏と河岸の社会との間で揺れる心に左右されていると言えないだろうか。

4. トウエインの寄る辺ない内なる自己ハック

自由で気楽で居心地の良い楽園のような場所をハックは“home”と呼ぶが、それは彼の創造主であるトウエインの考える“home”と重なるところがあるようだ。彼は1868年の12月、当時まだ恋人であった妻オリヴィアへ宛てた手紙の中で、“home”について次のように述べている。「安息の場所、疲れを癒す枕、心配、困難、そして苦痛からの逃げ場、天国のような所、ホーム」(Twain 1868: 345)。トウエインもハックと同じように、“home”をさまざまな煩わしさからの逃げ場、そして楽園のような場所と考えていたことがうかがえる。そしてさらに手紙を読

み進めていくと、トウェインの言及している“home”とは、遠い昔の、古きよき時代の、彼の記憶の中にある美化された故郷であることがうかがえる。

「心の奥底で私は去りし日々を、そして遠い昔の幻影を懐かしむのだ！——もはや見られることのない顔の数々を。親愛をもって眺めた人びとの姿を。私の耳には快い調べだった人びとの声を。暗闇の中へ消えてしまった休むことを知らぬ歩み。もう永遠に戻ることはないのだ。(中略)しかし君にはこのがらんとした気持ちが、この大きな空白が、この取りそこねた何か、失った何か、それは感じられるのだがことばでは言い表せない、この重々しい、不可解な寂しさが分からないだろう」(Twain 1868: 345-6)

トウェインは記憶にある美しい自分の故郷を、今は無きものとして喪失感をもって悲しく懐かしんでいるようである。「故郷においてよそ者」(Twain 1868: 345)という境遇はハックの立場と重なり、さらに両者とも自分の生まれ故郷を“home”と呼ばずに、現実にはないもの、楽園のような場所を“home”と呼んでいる。Pettitは、トウェインの故郷の喪失感を次のように分析している。「皮肉なことに、執筆や講演で南部を非難することをほぼ副職としながら、トウェインは、振り返ってみると、自分がかつて見たものを南北戦争前のエデンとして懐かしんでいるだけに過ぎないことに気づいたのである。それは過去に遠ざかれば遠ざかるほど魅力的なものになっていくのだ」(1974: 78)。トウェインの見た故郷とは、南北戦争勃発により蒸気船の水先案内人としての職をやむなく失う前の南部であり、それ以来、身を立てることに必死で、訪れる機会のなかった彼は、それを記憶の中で無意識のうちに美化していったことが推察できる。そして、そのような楽園としての“home”を探すトウェインの内なる自己が、『ハックルベリー・フィンの冒険』において、“home”を求めてさ迷うハックというキャラクターを創造するきっかけとなったのではないだろうか。南北戦争により故郷との繋がりを絶つことを余儀なくされ、いざ戻ってみるとその現実的な醜い面しか目に映らない、トウェインはそう感じたのだ。「君にはこのがらんとした気持ちが、この大きな空白が、この取りそこねた何か、失った何か、それは感じられるのだが言葉では言い表せない、この重々しい、不可解な虚しさが分からないだろう」(Twain 1868: 346)とオリヴィアに語ったが、このような、時代の大転換期に生き、運命に翻弄されるトウェインの、故郷に対する收拾のつかない、無念と困惑の心境をハックというキャラクターが背負っているのではないだろうか。

トウェインは、故郷を去ってから約20年後にミシシッピ河を旅するが、そこで彼の記憶にある美しき故郷、“home”を見ることはできなかった。『ミシシッピ河の生活』(Twain 1883)において、彼は故郷が文明化されてすっかり様子が変わったことに驚き、とりわけ、水先案内人として、自身の人生において重要な経験を積んだ、蒸気船が見当たらないことを深く嘆いている。かつてあったと信じる美しき故郷、“home”を見出そうと河を下って行く様子は、ハックの、自由で気楽で居心地のよい楽園のような場所、“home”を探し求めて筏と陸上の人間社会を行き来しつつミシシッピ河を下っていく様子と重なる。物語において風刺されている、河岸に住む人々の偽善的良心や中世騎士道的精神は、トウェインが、南北戦争で南部人を敗北へ導いた致命的欠陥としてたびたび揶揄していた「ウォルター・スコット病」に相当すると考えられる。ハックは筏の生活を楽しみながらも、ジムの存在に煩わしさをおぼえるが、これはハックもまた身に染み付いた南部社会特有の良心に悩まされるからであろう。トウェインはこの野蛮な因習を悔やみながら南部を批判し、故郷の喪失を認めたのかもしれない。

結 論

“home”を、一般的に、家族的愛情による人間の絆が存在する場所とするならば、一人で築くことはできない。そして人はそこに根を下ろして初めて自分の存在を確認することができる。つまり、そこはいつも帰る場所、すなわちアイデンティティの拠り所となる。“home”を失うということは、根無し草になり、自分が誰であるのか存在を認識できなくなるということを意味する。故郷を逃げてきたハックは、ジャクソン島に来てしばらくすると寂しさを訴える。彼はこれを“lonesome”という言葉で表している。星や、流れてくる木や筏の数を数えたり、島を散策しながら気を紛らそうとするが、程なく寂しさをおぼえてしまう。ちょうどそのような時に遭遇したのがジムだった。「おらが死んでねえことを分からせるのにそんなに手間ひまかからなかった。ジムに会えてほんとにほんとに嬉しかった。もう寂しくなんかねえ。おらはやつに、みんなにおらの居場所を教えるなんてことはしねえだろうなと言った」(Twain 1885: 51)。ここからハックの言う寂しさ(“lonesome”)とは、人々に死んだと認識されていることから生じる底知れぬ孤独感であったことがうかがえる。ハックは言わば、ジムだけでなくトムも一度はそう呼んだ、「亡霊(ghost)」になってしまったのだ。ハックであるということを誰からも認識されずこの世に存在することに、止め処もない孤独感を抱いていたのである。「自由で気楽で居心地の良い」生活を続けさせてくれ、且つ自分が何者であるのか判らないという恐ろしい孤独感からとりあえず解放してくれるジムは、ハックにとって恰好の仲間だったのだ。逃亡奴隷ジムの存在が心配の種で煩わしいならば、彼を放って一人で筏の生活を続けることもできたはずだ。しかし彼は、ジムがフェルプス農場で囚われの身となった時、地獄へ行く決心をしてまでもジムの筏に取り戻そうとする。「よし、こうなったらおら地獄へ行く」(Twain 1885: 271)という言葉は、ジムの助けで家族と再会させたい善意からというよりは、とりあえず「筏」の生活を再開させたいという、私意からであったのかもしれない。楽園のような生活を続けさせてくれて、自分のアイデンティティをも確認させてくれるジムが、今や不可欠な存在になっていることに気づいたのであろう。

作品の終わりではジムのどたばた解放劇により、トムが中心となり冒険が展開する。子どもでありながらひねた性格の持ち主であるハックは、結局のところ、『千一夜物語』を本気で信じるような少年トムが生きるロマンティシズムの世界はあり得ないと思う。河岸の社会はやはりハックの“home”にはなり得ないのであり、よって彼はまた“home”を求めてさ迷わなければならないのである。自分の故郷を“home”と呼べずにどこを“home”と呼べば良いのか、このように過去の記憶に振り回されるトウエインの寄る辺のない精神の混迷が、ハックというキャラクターに反映されているようだ。ハックは、作者の故郷に対して抱いている困惑した、複雑な思いを一身に背負っているのである。トウエインが求める「煩わしさ」を感じさせない場所、“home”を求めて延々とさ迷うしかない運命にあるのが、ハックというキャラクターなのではないだろうか。ミシシッピ河の流れは永遠には続くことはないため、ハックも「筏の生活」を継続させることはできない。そこで彼は南部社会から遠くかけ離れた「アメリカ先住民居住区(Indian territory)」へ行くことに決め、また逃亡の旅を続けるのであろう。

トウエインのノートブックにはハックが60歳になって故郷に戻ってきたと書き残されている。日付は『ハックルベリー・フィンの冒険』が出版されて6年後の1891年2月20日と記されている。

「ハックは60歳になって帰ってくる。どこからとも知れずに——しかも気が狂って。自分が

また少年に戻ったと思ってトムだとかベッキーだとか他の人々を見つけようと始終人々の顔をじろじろ見る。(中略) ついにトムが60年間世界を放浪した後に帰る。そしてハックに付き合っただけの昔のことを語り合う。二人とも惨めである。人生は不作だった。愛したものすべてが、美しかったものすべてが土の下にある。二人とも死ぬ」(Twain 1935: 212)

喪失感ゆえに記憶の中で美化されていった、樂園のような場所を“home”と呼ぶトウエインの代わりに、ハックはその“home”を求めて延々と旅し続けなくてはならない。安らぎの場を見つけられず、本当に気が狂う思いだったかもしれない。記憶の中で見え隠れする美しき“home”の面影を求めて混迷するトウエインの内なる自己を、煩わしさからの逃げ場として「筏」のような居場所、“home”を求めてさ迷うハックと重ねて見ることはできないのではないだろうか。

引用文献 ※鉤括弧内の訳はすべて筆者による

- Beaver, Harold. *Huckleberry Finn*. London: Allen & Unwin, 1987.
- Cox, James M. *Mark Twain: the Fate of Humor*. 1966. New Jersey: Princeton UP, 1976.
- Dyson, A.E. “*Huckleberry Finn* and the Whole Truth” . 1961. *Critical Assessments Vol. III: Mark Twain: Critical Essays*. Ed. Stuart Hutchinson. East Sussex: Helm Information, 1993: 337-348.
- Marx, Leo. “Mr. Eliot, Mr. Trilling, and *Huckleberry Finn*” . 1953. *A Case Study in Critical Controversy: “Adventures of Huckleberry Finn”*. Eds. Gerald Graff and James Phelan. New York: Bedford / St. Martin’s, 2004: 289-304.
- Pettit, Arthur G. *Mark Twain & the South*. Kentucky: UP of Kentucky, 1974.
- Twain, Mark [Samuel Langhorne Clemens]. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. Eds. Victor Fischer and Lin Salamo. California: U of California P, 2001.
- _____. *Mark Twain’s Letters: Vol. 2. 1867-1868 (Letters Vol. 2)*. Eds. Harriet Elinor and Richard Bucci. California: U of California P, 1990.
- _____. *Mark Twain’s Notebook (Notebook)*. Ed. Albert Bigelow Paine. 1935. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1972.

この原稿は大学院英文学専攻課程協議会第40回研究発表会における発表内容に基づく。